

へび 蛇と龍

蛇と龍とは切っても切り離せない関係です。インドの神である蛇神ナーガは仏教に取り入れられ、中国古来の龍神信仰と習合して龍王りゅうおうとされました。中国の龍は角・四足・鱗のある蛇体で、水中に住み雲や雨を起こし、また飛行して稲妻を放つ神です。この龍が日本に伝来し、蛇信仰に影響を与えていきます。

仏教に取り入れられた龍は、仏法守護の八部衆のひとつとされ、『法華経』において八大龍王はちだいりゅうおうとして説かれます。龍はもともと水をつかさどると考えられていたもので、八大龍王の力を借りて雨を降らせる祈雨きうぼうの法が、僧侶そうりよによって行われるようになっていきます。

こうした信仰が民間にも広がり、龍神に雨を乞う行事は全国的に行われるようになります。また、水をつかさどることから、雨だけでなく洪水の防止を願ったり、漁業の安全を祈ったりする行事も行われています。

埼玉県内でも、鶴ヶ島市の「脚折雨乞つるがしまし すねおりあまごい」では藁で龍を造り、雨乞いを行っています。埼玉県内では、雨乞いのみを目的としたものは、蛇ではなく龍を造ることが多い傾向にあります。

しかし、水をつかさどるという性格は蛇信仰も同じであり、龍と蛇は重なり合いながら信仰されています。「安行原の蛇造り」でも、元々蛇じやは普通の蛇ではないとはいえ、髭があるという特徴は龍を連想させます。他地域の藁蛇行事でも、蛇と呼んではいても、龍を連想させる形のものもあり、人々の中では龍と蛇が互いに水をつかさどるものとして関係づけられながら信仰されてきたことがうかがえます。